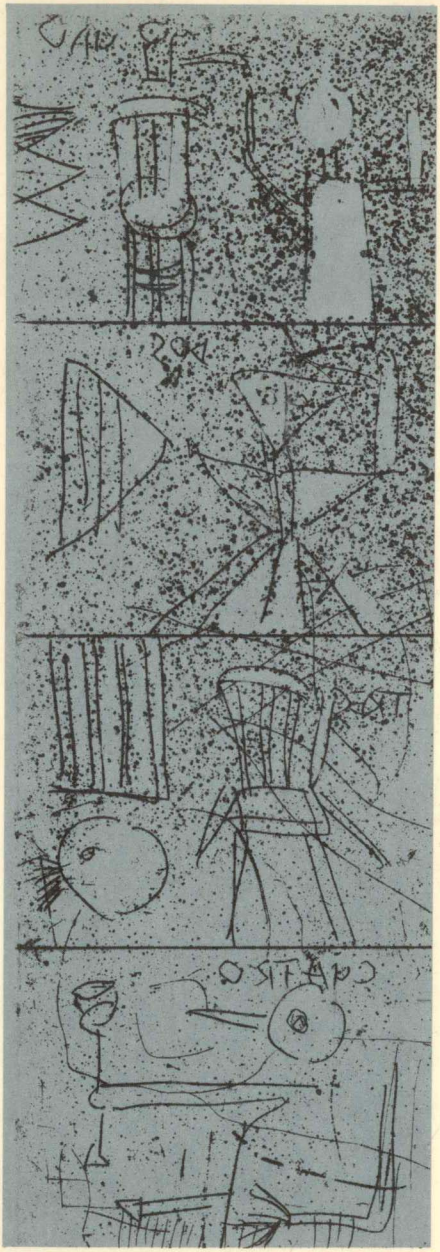
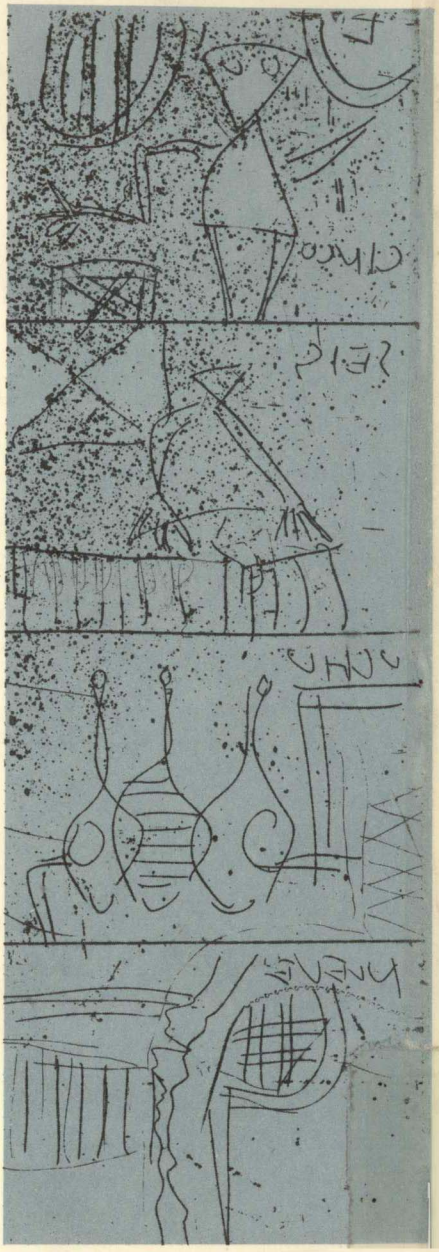


関西地下文脈

小島輝正



葦書房

関西地下文脈
一九八九年一月二十七日発行

著　者　小島輝正
発行者　小野十三郎
発行所　葦書房
大阪市南区谷町七の二の二の三〇五　新谷町第一ビル
〒542　電話〇六（七六八）六一九五
郵便振替大阪六―四三五五〇

編　集　境涯準備社
茨木市片桐町十三―三十三　高村三郎方　〒567

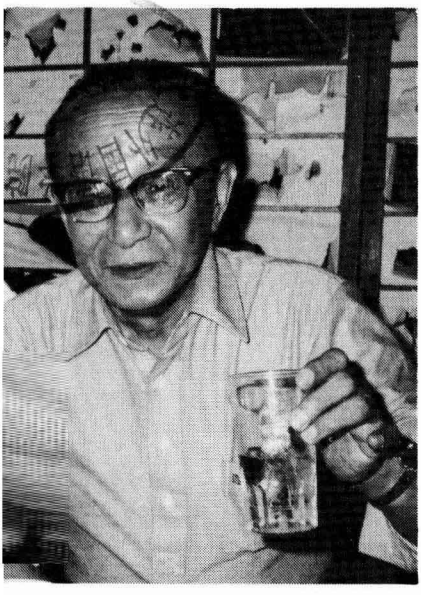
発売元　有限会社・浮游社
大阪市天王寺区石ケ辻町三の一〇　宝栄ビル四〇四号
〒545　電話（FAX）〇六（七七二）七六七二

装幀・粟津謙太郎／写真・北村棲子／ワープロ・西村郁子／
写植・野口豊子／印刷・製本・三国印刷所

頒価　二〇〇〇円

関西地下文脈

小島輝正



葦書房

はじめに

文学の〝無名戦士〟のために

大阪文学学校の月刊発表誌『樹林』に、関西一円で発行されている文芸同人誌の「総めくり」のようなものを連載で書きはじめたのは、昭和五十三（一九八一）年の十二月からである。

はじめは二年ぐらいで終わるかと思っていたが、書いているうちに長くなって、結局、約五年、回数にして五十二回かかって、このほどようやく書きおさめることができた。

その間にふれた雑誌の数は約百八十種、原則として発行継続中のものに限ったから、ここ五年ほどの間に関西で出ていた文学雑誌の数は――私の眼の届かなかったものもむろんあるだろうが――だいたい、そのくらいということになる。

文学同人誌といっても、手をひろげれば、詩誌もあり、歌誌や句誌もある。それらをふくめれば、その数は前述の数をはるかに越える。そこまでは到底手がまわらないので、対象は私の守備範囲である小説・評論、つまり散文中心の雑誌にとどめている。

また、おおまかに「同人雑誌」と書いたが、別に「同人制」にこだわったわけではないので、扱ったもののなかには、個人発行誌もふくまれ、会員誌、機関誌、寄稿誌のようなものもふくまれている。要するに、営利を目的としない――あるいはそれを目的としていても「儲ける」ところまでは見たところいきかねる――「持ち出し」の雑誌、ということになる。

どういうつもりでそんなものを書きはじめて、かつそんなにも長々と書いたのか、とあらためて聞かれると、ちょっと返答に困るが、要するに、物好きでなんとなく書きはじめ

て、物好きのまま結局五年間毎月、気がついてみたら枚数にして四百字八百枚ほど書いてしまっていた、というのが実状である。

とりたてて難しいことを書いたわけではない。創刊のいきさつやら、同人の顔ぶれやら、その変遷やら、雑誌の性格やら、主だった掲載作やらについて紹介し、ときに手短かな印象批評を書きそえただけである。

ただ、それらについて書くためには、まずそれらを読まなければならなかった。この連載のために私が毎月費した時間のうちの多くは、読むために費された。ほかに、私の手もとになかったバックナンバーをまとめて入手するための手間とか、ときには、誌面にはあらわれていない事情をたしかめるために足を運んで当事者に会ったり、手紙を往復したりする手間とかが加わったが、何といっても最大の費料は雑誌の現物である。それをいかにこまめに読むかが、できるだけ誤まりなく紹介するための決め手であった。それをせっせとやっているうちに、五年たってしまったのである。

したがって、書き終わったいま、その結果を総括するとか分析するとかいうつもりは私にない。こまめに読めば読むほど、あるいは種類を数多く読めば読むほど、「持ち出し」雑誌というものがいかに千差万別で、ほとんど個々の人間に接するほどの異った志向――嗜好といってもいいが――を持っているか、ということが分かっただけである。

しかし、そういってしまっただけでは、人さまがなかなか納得してくれないだろう。せっかく八百枚書いたのだ、なにか結論のようなもの、あるいは現状分析か今後の展望のようなものがあるはずではないか。それを聞かせてほしい、という註文が出るのもむりはない。

女性の書き手がふえたとか、若い年齢層の書き手が総体として少ないとか、そういうすでにいい古されたことならば、いくつか書きならべることもできよう。しかし、私が百八十種類の雑誌に眼を通したところで感じるには、同人誌――「持ち出し」という意味での――性格、心根のようなものは、書き手が男であろうと女であろうと、あるいは老年であろうと若年であろうと、時代や状況によってそう変わるものではない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

さきに書いたように、それぞれに体臭や身ぶり口癖は異っているが、たとえ身銭を切っても、ものを書いてそれを雑誌にし、仲間うちでほめたりけなしたり、ときには喧嘩別れしたりなじみ合ったりしながら、そのことに眼を輝かし、生きる甲斐をおぼえる、という意味では、同じ文学好みの仲間同志なのである。

そこには、世にいう中央文芸誌、晴れがましく新進作家、流行作家としてもてはやされる有名人志向と部分的には境を接しながら、圧倒的大部分は能力を正当に認められぬまま無名に埋もれて書き絶えてゆく、文学の草の根たちがいる。そして、もしそれがなくなれば、文学は根もとから枯れはてるだろう。

私の八百枚は、それらの無名戦士たちに捧げられるものである。

目次

関西地下文脈

はじめに――文学の〝無名戦士〟のために……2
関西文脈人脈……10
結語……345

あ

AMAZON……12
蒼き傍観者……15
葦……17
あけぼの……18
あしあと……19
アレキバ……20
アルゴン……59
アルカイド……174
あもん……229
茜（別冊茜）……270
ア・イ……342
あさくら……289
a－ya……290
アンドロギュノス……339
移動と転換（煙のせいれん所）……60
胃袋……29
稲妻……26
いぶき……59
一石……196
いずみ……283
イオム通信……197
海坊主……339
遠雷……173
おにふ……33
大阪文学学校……59
大阪の文学……164
丘……171
大阪泉文学……194
近江文学……297

海峡……33
花盗……62
海馬（「砂塵」「海峡」）……76
崖……25
解氷期……93
慣性航法……115
蟹……129
かわら版……200
貫生……215
海燕……225
翡翠……306
革……255
火曜……264
海浪……268
関西文学……311
鬼子……78
奇蹟……69
境涯……104
黄色い潜水艦……230
虚無思想研究……252
近代風土……257
きのくに文学……310
久坂葉子研究……25
嘴……32
群棲……224
草の根……239
秋鶏……271
くうかん……294
群鶏……343
形相……71
煙……80
原声……132
渓流……195
京阪神文学……204
原石……339
原生林……340
神戸文芸……74
航路……123
構図……138
独楽……142
骨董……211
神戸文学……250
言の葉……272

雑踏……50
再現……52
雑記……100
鎖群……227
雑草……237
西幡文学……274
されど……341
少数者……27
新文学……60
少年……89
奬……113
斜光……147
咲……149
滋賀民主文学……194
紫煙……196
しきさぎ……222
新文学山河……240
七曜……243
而して……253

● さ ●

潮騒……284
滋賀作家……292
駟駱……343
じゅん史・中之島……344
樹林……231
水晶群……36
随筆こうべ……122
すみれ通信……176
青年の環……61
政治と文学……88
雪渓文学……134
せる……152
全気象文学……209
芹……229
世紀末研究……256
泉北文学……338
蒼馬……87
象眼……103
想像力……150

● た ●

短絡……172
たろうす……185
田道間……284
直線……126

鳥語……303
積木……344
てくらまぐら……108
手通信……175
てんまど……219
てまり……263
十日……38
どまんなか……60

● な ●

内部都市……110
人魚……228

● は ●

半獣神……40
走れメロス……59
八月の群れ……122
叛火……139
蜂の巣……140
阪神文芸……208
燔祭……307
バラレル・ワールド……336
ひのき……64
ひとり……298
文学塹壕……22
独創……85
鈍……138
ところっぷ……120
豊中文学……178
遠やまびこ……202
渡河……228
とぼす……273

熱帯夜……342

文学雑誌……44
文学地帯……55
文学生……146
文芸45……147
文学阪神……193
文学空間……226
文芸ひょうじ……246
文学評論……265
文脈……266
文芸・日女道……277
文芸淡路……280

文苑……287
ぺんしる……285
PO……117
星……145

法螺……166
凡……227
ぽふ……344

● ま ●

まひる……60
檣（マスト）……248
まほろば……299
真砂文学……311
緑の狼……61
民衆……140
実生……143

蜜蜂……145
みのお文芸……181
夢幻……269
燃える河馬……98
模索……136
苜蓿……260

● や～ん ●

八尾文学……183
吉田民主文学……195
らぐたいむ……139
柳絮……66
流域……258

流沙……170
歴砦……241
六甲文学……31
労務者渡世……216
輪……156

● 水先案内 ●

北川荘平　大いなる遺産……350
福田紀一　小島流『神曲』……352
川崎彰彦　ずぼらな相棒の弁……355

● 登場作者名一覧 ●

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

関西文脈人脈

毎日新聞の夕刊に同人雑誌の月評のようなものを書き出したのは、昭和四三年の三月からである。

もっとも、はじめの三年ほど、つまり四五年末までは、同人雑誌だけを対象にしたものではなかった。タイトルも「関西文壇時評」で、地域は関西に限られていたが、同人雑誌だけでなく関西在住の書き手の単行本や、関西の出版物、文学状況一般にも自由にふれることができて、いま思うと随分勝手なことの書ける欄であった。毎日大阪本社の自前の欄で、したがって掲載範囲も関西に限られていたが、それだけにフリーで特色も出せたし、枚数も四枚あって結構気楽に書けた。月によってはほとんど同人雑誌の作品評ばかりやっていることもあって、範囲が狭いだけにかなり親切に書けたというところもある。

松原新一と隔月の担当で、これは約三年間、ほぼ毎月掲載された。

この欄がなくなって、タイトルが「同人雑誌採点」に変わり、対象地域も関西だけでなく東海・北陸以西の「西日本」と一きょに拡大されたのは、昭和四六年からである。これは、東京の久保田正文が昭和四一年四月から担当して、のちには月ごとに「東京」「東・北」「西・南」と地域を別けて一手に引き受けていたものを、この時から「東日本」「西日本」に改めて、前者を久保田が、後者を松原新一と私とが担当することになったものである。後者における担当者の変遷は別として、この方式は今日まで続いて一〇年を越した。ただし、タイトルはどういうわけか五一年から「採点」がとれてただ「同人雑誌」になった。これは、教師である私がいうのはおかしいかもしれないが、その方がいい。

（ことのついでに書いておくと、毎日新聞が同人雑誌の紹介や批評のようなものを紙面で扱うようになったのは、昭和三六年一〇月からで、タイトルはその後いろいろ変わり、無署名で行数も少ないが、とにかくさきの四一年四月久保田正文による正式？　の発足まで断続的に続いている）

松原新一との隔月担当は、四八年から川崎彰彦が加わって三人になり、五三年から松原が退いて、現在のように川崎と二人になった。その間、新聞社の都合や、こちら側の事情もあって、必ずしも毎月着実に掲載されたわけではない。年によっては随分乱れがある。しかし、とにかく続いてきた。最近ではわりに安定してきて、毎月ほぼ定期的に出て

いるはずである。

忘れないうちにもう一つ書いておくと、この月評とは別に、四九年に二回だけ、同人雑誌連載ものの長篇の批評をのせたことがある。連載ものは、完結を待ってはじめから読み返さなければならないという事情もあって、月々の作品評のなかではなかなか採り上げにくい。長いものほど尚更そういうことになる。はじめから気にかかっていたことなので、こちらから希望して別枠を設けてもらった。私としてはこれが大いに気に入っていて、あわよくばそちらの方専門にまわろうと思っていたくらいだが、これは新聞社の方の事情が許さなかったらしくて、二回だけで打ち切られた。その後はやむをえずその都度の月評に取り入れるようにしているが、今もって未練がある。連載ものは同人雑誌の目玉であり、しかもプロ作家の場合のように完結したら間違いなく本になるというわけにはいかないからだ。

こういうことで、始めからいえば一三年余り同人雑誌との付き合いが続いた。その間にわれわれ三人がその欄でふれた書き手の数は、名前と作品名だけというのまで入れると、実数で七三〇人ほど、なかには同一人で何回もという人がいるから、延べでは一、一〇〇人余りになる。雑誌の種類でいうと二二〇ほどになる。数が自慢という性質のものではないが、袖振り合うも他生の縁ということもあって、私にとってこの人たちは無縁の人々ではない。私のいささか摩耗した記憶装置のどこかにこの人たちの名前は打ち込まれてもいる。

ただ、私も、いくらか物好きに属する同人雑誌愛好者の一人ではあるが、日本全国はもとより、長年接した「西日本」に限っても、同人雑誌という同人雑誌を眼の敵のようにして読みまくるというほどの物好きではない。月評の仕事がきっかけになって関西以外の地方の作者から便りをもらったり、こちらからも出したりということはあって、それはそれで嬉しいことだが、それ以上の機会も欲も無精者の私にはない。私の守備範囲は精々関西どまりである。

関西の同人雑誌は、詩誌のいくつかを含めて大たいは寄贈にあずかっていて馴染みが深い。頗見知りの人々も多い。お礼の意味をかねて一度それらの雑誌について書いておきたいと思っていたのが、これからしばらくの間この雑誌に連載することになるはずのこの文章である。ただ、詩誌については私は適任ではない。誰か然るべき人がこういうものを書いてくれるとありがたいとは思うが、これは誌数からみても大変で、誰に頼むというわけにもいくまい。

関西でいま発行されている文学雑誌――必ずしも同人雑誌とは限らない――は、私が知り得たかぎりで三七〇ほどある。ただし、歌誌、句誌を除いてである。その全部の現物を私が確認しているわけではなく、特に詩誌についてはそうなので、なかには有名無実のものが含まれているかもしれない。逆に洩れがあるかもしれない。したがって、これはあくまでも概数である。

詩誌とか小説・評論誌とかいっても、なかにはその双方にわたっているものがあり、詩ばかり、小説ばかりというのはむしろ少ないから、その区分はさだかでない。ただ、明らかに小説・評論主体のもの、あるいは少なくとも相当な頁数を小説・評論にあてているものということになると、その数はさきほどの概数の約三分の一で、三分の二は詩誌と呼んでよかろうと思う。その三分の一についてこれから書くつもりだが、これも草の根分けてもというわけにはなかなかいくまい。まずは楽しみ半分にゆっくりと書く。

アマゾン　AMAZON

最初は尼崎の『アマゾン』（正しくは横文字でAMAZONである）のことを書く。これが最初になったのは、たまたまアイウエオ順の私の関西同人雑誌住所録の筆頭に出ていたということもあるが、古くからの馴染みで書きやすいということもある。編集人を長くやっている御厨善定（以下敬称を略する）とも随分以前からの顔見知りである。実はこの原稿を書くまえに一夕歓談して、思い出話や近況を聞かせてもらった。以下に書くことも、したがって、聞書に類する部分が多い。ただし、文責は一切私にある。

創刊が昭和三七年六月、来年で二〇周年ということになるが、今年の一〇月末現在で二一八号まで出ているから、ただ古いというだけではなく、その間ほぼ確実に月刊を維持してきたということで、これはやはり珍しい。関西の文学雑誌では、いずれ書く『VIKIVG』（三六九号）に次ぎ、『関西文学』（二一七号）とこの『文学学校』（改題前の『新文学』から通巻二〇三号）とならぶ月刊誌である。

最初の発案者は松尾亮であった。松尾亮は、私が勤める神戸大学の文学部新制第一回の卒業生で、したがってこれも古くからの付き合いである。卒業後尼崎市役所に勤めていたが、早くからのもの書き志向で、『アマゾン』創刊まえには一時『VIKIVG』に籍をおき、かつ大阪文学学校の受講生でもあった。初期『アマゾン』の発行母体であった「尼崎文学研究会」は、その関係で彼が当時の文学

AMAZON

学校チューターだった井上俊夫の助力を得て創設したものである。井上俊夫はその後も一年ほど講師として例会に出席し、「尼（崎）ゾーン」と勇猛な女兵士アマゾーネスとにかけた誌名『アマゾン』も彼の発案によるものであった。

松尾亮は、英語に堪能なのは英文卒でふしぎはないとして、馬術にも堪能という人物で、昭和四二年には単身イギリスに出かけ、帰ってからその時のことを『アマゾン』に連載で書いて、この文章は四四年五月に『こんにちはイギリス』という標題で本になった。発行元は他ならぬ葦書房である。今よんでも面白い紀行文で、私は短い跋文を書いた。その後の西洋体験記ばやりからいうと、むしろ時期が早すぎたのが不運というべきだろう。市役所をやめてしばらくしてから今度はニュージーランドのさる大学の日本語・日本文学の教師の公募に応じて赴任し、任期六年を勤め上げてから、去年帰国して今は福井工大の留学生向け日本語の教師になっている。その間も『アマゾン』にずっと書き続けて、ほとんどその都度われわれ三人のうちの誰かが毎日の月評で採り上げているから、小説書きとしての力量も確かである。

さて、その松尾亮がはじめた「尼崎文学研究会」の、最初のうちはガリ版数頁の「会報」だった『アマゾン』と、会内に「創作グループ」ができてから三九年にはタイプ印刷になって頁数も次第にふえ、四〇年には表紙をつけて雑誌の体裁をととのえ、四二年秋には活版になり、四五年の六三号から発行母体も「研究会」から「集団AMAZON」に変って、名実ともに同人雑誌として自立した。現在、月平均六〇頁の月刊、同人数二八名（うち女性一〇名）、他に会費と作品掲載の際の費用に同人と若干の相違のある「会員」が三五名ほどいる。

その編集を昭和四〇年から、中途四カ月ほどの肩代りをのぞいて現在まで続けているのが、さきに書いた御厨善定である。作品集に『喪笛』（四八年）があって、筆歴の長い実力派の書き手だが、月刊誌の編集を、原稿の取捨選択から割付、印刷所とのやりとり、校正まで独力でやっているのだから、これは並大抵の苦労ではあるまい。私などは聞いただけで気が滅入る。原稿の方はいつでも五、六カ月分はたまっていて集める苦労はないそうだが、それだけに取捨に骨の折れることと思われる。これはどこでも同じで、財政のうえでも、掲載料免除の基礎枚数が次第に減って今では二〇枚、それをこすと一枚三〇〇円徴集せざるを得ないそうで、それが悩みの種だそうだが、この程度の掲載料ならば、同人費月額二千円を考えても、ほかにくらべればむしろ安い。印刷が長年馴染の神戸刑務所で、

印刷費が市価に比して格安というのが、それですんでいる理由であろう。ただし、刑務所も今はおいそれと引き受けてくれないから、あわてて話を持ち込んでも無駄である。

ところで、肝心の内容だが、これもお愛想ぬきに水準が高い。いい書き手をそろえている。順不同でならべてみると、すでに書いた二人は別として、昭和五〇年に神戸のブルーメール賞、五二年に新日本文学賞をもらった福元早夫、四九年に農民文学賞、五四年ブルーメール賞の桜井利枝、五五年ブルーメール賞の吉保知佐、今年の「文学界」一一月号で評論では二〇年ぶりという同人誌からの連載作「会津八一論」を書いた堀巌（この人はこれまでに小説でもいいものをいくつか書いている）、ほかにも小説ではまだ若いが力のある内田照子、坂田玲子、島田勢津子らがおり、評論では自ら『少数者』を主宰してそこに小林秀雄論を連載してこれが近く本になる森脇善明がここのメンバーでもあって目下河上徹太郎論を連載している。また、アラン・マーシャルの『松葉杖なんかへっちゃらさ』の訳を連載して最近樗欅社で本にした射場鉄太郎、現在の発行人で手がたいエッセーを書く渡谷駿次郎、詩で詩集『生える』を出して、生活詩派として評判になった沢田登美子もいる。また、この詩集は毎日テレビの一ディレクターの目にとまり、近日中にドキュメンタリー番組に登場する。沢田はさきの福元早夫の夫人である。まずは多士済済というべきであろう。

ちなみに書いておくと、これらの人々のなかには大阪文学学校経験者が少なくない。創始者の松尾亮についてはさきに書いたとおりだが、福元早夫は修了生で現通教部担当の講師だし、堀巌や内田照子も、今は関東に移住しているが同ようでこれもかつてはチューターをやっていた。そのほか、田近愛子、西川正明、西田克子、羽間美智子、本多明恵、吉保知佐（本名新田道子）の同人も修了生。会員の堀光子、岩堀幸、小林みえ子、宇江（岡本）武子、太田政弘、国本芳樹、沖田弘子島田勢津子、山口和之なども修了生である。

ただし、ここで見栄を切って、大阪文学学校の蒔いた種子が、などといい出すとこれは身の程知らずになる。なかには見切りをつけてやめていって、それがよかったという人もいることだろう。これは人さまざまである。

かつて『アマゾン』に在籍し、いい仕事を残していった人たちにまでふれるゆとりはここではない。しかし、昭和四五年から五三年にかけて七年半、連載七七回、四千五百枚をこえる大仕事になった旧同人日野善太郎の『限りなく六月』だけは書きとめておくべきだろう。これは彼の大仕事だっただけではなく、

編集者御厨善定の大仕事でもあった。完結後、本にできるよう私も努めてみたが何分にもその量で残念ながら実現していない。同じ尼崎の『変革者』からここに移った日野は、これを書いてから『アマゾン』を退いて、今は大阪釜ヶ崎の『労務者渡世』に拠って独特の飯場ものを書き続けている。この雑誌とともにいずれ改めて登場してもらうことになるだろう。

『アマゾン』には、関東在住のメンバーが、さきの堀巌や内田照子をはじめとして何人かいる。本拠地の尼崎での毎月定例会とは別にこの人たちが東京で例会をやり、さらに、神戸以西の同人が小人数で神戸例会をもやっている。そして、その各例会の記録を「例会通信」として毎号のせている。これは、ご存知『VIKING』がごく初期からやっていることで、東京に支部ができてからはやはり双方の例会記を毎号掲載している。この例会記は、ただの記録としてではなく、一つの書きものとして次の例会での合評の対象になるから、私自身も『VIKING』時代に経験があるが、記録するのも、それを整理して原稿にするのもなかなか骨の折れる仕事になる。これを同人が交替でやるので、支部間の意思疏通ということだけではなくて、定例会の慣行そのものとならんで個々の同人の参加意識をも保障することになる。『アマゾン』の活性持続の源泉は、『VIKING』のひそみにならったこの「例会通信」にあるのかもしれない。

『アマゾン』連絡先
(665 宝塚市逆瀬川台5の22の13　西川方)

蒼き傍観者

『蒼き傍観者』という、ちょっと変わった誌名の雑誌がある。創刊が七七年六月で、八一年の七月に7号が出た。現同人数六名という小さな世帯で、創刊時から顔ぶれはいくらか変わっているが、人数はほとんど変わらない。発行元は同人の一人で最年少の井上理の住所である神戸の長田区になっているが、他の同人はいずれも大阪周辺や奈良の住人で、職場も大阪の業界新聞や学習塾だから、主体は大阪といってよかろう。

創刊号の編集後記に、実質的編集者でその後もほぼ毎号後記を書いている竹中正が次のように書いている。

「バカみたいに酒ばかり飲んでいても仕方がないからイッパツ雑誌でも出そうではないか、とこの小誌の発行を企ててから、なんと

2

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com